

寄り添う ドキュメンタリー

映像制作者 菅原 広司

- 2013年 大阪芸術大学附属 大阪美術専門学校 総合デザイン学科コミュニケーションデザイン専攻(現デジタルデザイン専攻)卒業後、フリーランスとしての活動を開始。
- 2014年 プライダルウェディングのエンドロールムービー編集者として1,000本以上の映像を制作。
- 2021年 大阪美術専門学校非常勤講師、放送芸術学院非常勤講師として勤務。

現在、撮影・編集を1人でこなしながらフリーの映像ディレクターとして活躍中。



撮影場所：大阪美術専門学校ラウンジ

美専に入るまで

実は大学を卒業してから美専に来ているんです。大学では社会学を勉強していました。フィールドワークとしてさまざまな人に聞き取り調査を行いました。今思うと、それが現在のドキュメンタリー制作の下地になっているように思います。そうして自分が作る方へと興味移っていき、美専への入学を決めました。

学生時代の思い出

美専では映像ではなく、コミュニケーションデザインという専攻を選びました。南珠里先生が担当する1回生の最初の授業で「将来、何がしたい？」と質問されて「映像がやってみたい」とボソッと行ったんです。それを聞いた南先生はその場で地下の映像スタジオまで連れて行って、東陰地正喜先生を紹介してくれました。東陰地先生もすぐに「来ていいよ！」と言ってきて、次の日から映像の授業にも参加することが決まりました。「なんてオープンなんだろう…！」と驚いたのを今でも覚えています。それから1回生の夏休みには松井公一先生が監督され

た映画「G&G」にもスタッフとして参加させてもらったり、映像専攻と一緒に進級制作を作らせてもらったり。技術だけを教えてもらうというよりは、一緒に作る過程の中で制作の面白さを体験することができました。その時に経験した楽しさが、今も映像制作を続けているモチベーションになっています。コミュニケーションデザインの専攻では細沼俊也先生のもと、プランニングやプレゼンテーションなど今の自分に必要なスキルの多くを学びました。好きなことと必要なこと、この2つを学ぶことができました。また美専で出会った同期や先輩、先生方と今もつながりが続いていることに本当に感謝をしています。

アシスタント時代

美専のアシスタントとしては3年間、勤務させていただきました。メインの仕事は教室の管理でしたが、先生と学生の間にサポートをする事も自分の仕事だと思っていました。大切だと思ったのは学生の話をしっかり聞くという事でした。現在、講師として教える立場になりましたが、この時の経験が生かされていると思います。

美専は小さい学校ですが先生と学生の距離が近くて。放課後に卒業生が訪れて、相談したり、話に来たりする姿もよく見ます。縦のつながりが強くて、ふらっと気軽に遊びに来れる空気感が美専の良さなのかなと思っています。

現在の仕事

卒業してすぐにブライダルウェディングの業界で、エンドロールの映像編集という仕事を始めました。結婚式が始まって終わるまでの数時間の間に一本のダイジェスト映像を完成させなければならぬこの仕事。いつも時間とのプレッシャーに追われながらの仕事でしたが、完成した映像を最後、会場で上映して感動を共有できる瞬間が好きでした。



森のウェディング - forest wedding party -

去年、撮影と編集の両方を自分1人でやっていきたいという思いから、ブライダルの仕事を離れました。そのタイミングで「木津川アート2021」というアートイベントの映像制作の仕事依頼されました。木津川市の〈みかのほら〉という地域で1週間、レジデンス、滞在生活しながら映像をYouTubeにどんどんアップしていくという仕事。



Documentary of Kizugawa Art 2021



YouTubeで見る



ドキュメンタリー みかのほら〜とができるまで



YouTubeで見る



撮影場所：大阪美術専門学校スタジオ

当初はアート作品の記録映像を残す、というテーマの撮影のつもりでしたが、レジデンスしながらその土地で暮らすことで見えてきた風景や自然の美しさに気がつき、最後はそこに暮らす人や歴史へとテーマ、被写体に変化していきました。この映像は40分のドキュメンタリーというカタチでYouTubeに残っています。その場所で生活しながら人と会って話す、聞く、映像を撮っていく、そこからテーマや被写体に変化していった、という体験がとても面白かったです。今年も同じ地域で「みかのほら〜と」という行政主体ではなく、そこに暮らす住民主体のアートイベントが初開催され、ドキュメンタリーを撮っています。

他にも、さまざまなアーティストや劇団のドキュメンタリー、作品の記録などを請け負っています。

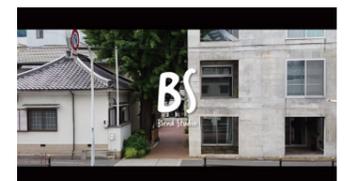
最後に

今まで自分が映像の仕事をやったのは、人とのつながりや縁のおかげだと思っています。感謝の気持ちを忘れずに、人とのつながりを大切に自分にか撮れない映像とはなにかをこれからも探求していきたいと思っています。

取材・文責/企画広報委員 東陰地 正喜



①



②



③

- ① ウンゲツイーファ演劇作品「ラバーソールズ」ダイジェスト
- ② Blend Studio プロモーション映像
- ③ こうべくつ家 15周年プロモーション映像「はじまりの続き」